

16世紀の世界の貿易（大航海時代） 銀がつなぐ世界史

16世紀、スペインとポルトガルが中心となり、アジアの香辛料を入手するため、海上の交易路を利用する大航海時代が始まった。その背景には、ムスリム商人から学んだ航海術や羅針盤の発達も影響していた。スペインは、コロンブス（1451 - 1506）やマゼラン（1480 - 1521）による南米からフィリピンを経由するルート、ポルトガルはバルトロメウ＝ディアス（1450 - 1500）、ヴァスコ・ダ＝ガマ（1460頃 - 1524）らによって、アフリカ、インド、東南アジアを結ぶルートを開拓した。

スペインは、古代アメリカ文明のアステカ帝国とインカ帝国を滅ぼし、中南米へ向けたカトリック教会の布教を進めた。一方、アメリカ大陸からヨーロッパにむけては、南米原産の野菜（トウガラシ、トマト、トウモロコシ、ジャガイモなど）、タバコその他、疫病として梅毒も流入した。

植民地化が進み、重商主義による奴隷制プランテーション農業（砂糖、カカオ）を大規模にすすめ、鉱山から多くの金銀を採掘し流出させた。また、南米原産の希少な染料、コチニール染料をスペインが独占的にヨーロッパへ輸出し、莫大な富を得た。また、新大陸より大量の銀を持ち込んだことで、ヨーロッパでは急速に物価が上昇し価格革命が起こるとともに、商業の中心は地中海沿岸から大西洋沿岸へ移動し商業革命もすすみ、社会・経済構造の変動がもたらされる結果となった。